

ICCAE

 news
No.16 2009. 9. 1

名古屋大学 農学国際教育協力研究センター ニュース

平成21年9月1日発行 第10巻 第1号(年2回発行;通巻16号)

発行/名古屋大学 農学国際教育協力研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町

TEL 052-789-4225(受付) FAX 052-789-4222

<http://iccae.agr.nagoya-u.ac.jp/index.html>

e-mail:iccae@agr.nagoya-u.ac.jp

第10回オープンフォーラム 開催のお知らせ

国際協力に対する大学の貢献のあり方:
戦略的参加にむけて

—農学知的支援ネットワークの設立—

開催日: 2009年10月8日(木)~9日(金)

会場: 名古屋大学野依記念学術交流館

農学国際教育協力研究センター(ICCAE)は、第10回オープンフォーラムを本年10月8日(木)から9日(金)に名古屋大学野依記念学術交流館で開催します。本フォーラムでは、我が国の大学や国際農業研究機関による農学分野における国際協力活動を推進するため、この機会に設立される予定の「農学知的支援ネットワーク」の活動内容や今後の可能性について広く意見を求めるとともに、大学の国際協力事業への戦略的な参画に有用な情報を参加者間で共有する予定です。既に参加を表明されている大学のみならず、多くの大学や研究機関からのご参加をお待ちしています。

平成21年度科学技術振興調整費 「国際共同研究の推進」に採択 「東アフリカ稲作振興のための 課題解決型研究」

平成21年度文部科学省科学技術振興調整費「アジア・アフリカ科学技術協力の戦略的推進(国際共同研究の推進)」に「東アフリカ稲作振興のための課題解決型研究」が採択されました。本年度から3年間の予定で、ケニアを主な対象国として、現地に適

したイネ品種の開発と稲作普及のための国際協力に直接的に役立つ知見・技術の創出に向けた国際共同研究に取り組みます。本研究には、名古屋大学、一橋大学および農業・食品産業技術総合研究機構農村工学研究所に加え、ケニアのジョモケニヤッタ農工大学とマセノ大学が参加します。また、愛知県総合農業試験場山間農業研究所とも連携して研究を進める予定です。

サブサハラアフリカ諸国では、コメの消費増加に国内生産が追いついていないため、コメの輸入に多額の外貨が使われており、コメの増産が重要な課題となっています。とくにアフリカ稲(*Oryza glaberrima*)とアジア稲(*Oryza sativa*)を種間交雑して生まれた陸稲ネリカ(New Rice for Africa: NERICA)は、アフリカのコメ増産に役立つ作物として注目されています。

コメ増産の機運が高まっている東アフリカのケニアでは、標高1100メートル以上の高原地帯に高収量が期待できる広大な農耕適地や未利用の天水低湿地が広がっており、コメ生産量を底上げする大きなポテンシャルがあると考えられます。しかし、東アフリカの農業は、不安定な降雨パターンと不十分な灌漑施設のため、早ばつの危険にさらされています。また、東アフリカの高原地帯のうち標高1500mを超える地域では、雨季の夜温が13℃程度に低下することがあり、冷害とそれに伴ういもち病の発生が問題になります。

そこで本研究では、東アフリカにおける稲作普及を阻害している要因として、主に早ばつと冷害に着目しています。栽培学、作物生理学、作物育種学、土壌学、農業経済学、リモートセンシングの分野における実績があり、アフリカの農業を熟知した研究者が協働し、地理情報システム(GIS)を利用した稲作可能地域分級地図の作成とポテンシャル評価、ネリカ品種の乾燥および低温耐性の評価、冷害回避栽培技術の開発、現地環境に適したイネ品種の育成、



イネの生育調査の様子

稲作普及のための社会経済的条件の解明などに取り組みます。研究期間終了後には、国際協力機関との連携や国際協力関連の助成プログラム等を通じて、研究成果をアフリカ稲作振興のための国際協力に活用することを目指しています。

(楨原大悟)

平成21年度科学研究費補助金に1件採択

ネパールの森林保全における家畜糞尿を用いたバイオガス導入の効果に関する実証研究(2009-2011)

多くの開発途上国における森林減少の一大要因は、日々の煮炊きに用いる薪炭材です。家畜糞尿を用いたバイオガスは、薪炭材利用量の削減と、資源の有効活用による森林保全活動の一環として、NGOや国際機関の支援を通じて多くの開発途上国で導入が進められています。しかし、バイオガスの導入による影響は、薪炭材利用量の削減に効果があるという点以外は明確になっておらず、特に森林資源全体やその管理主体である地域住民の生計活動、森林管理体制、地域社会などに対する影響が明確にされていません。この研究では、バイオガスの導入から20年近く経過しているネパールの丘陵地において、バイオガスの導入が薪炭材利用量だけでなく、森林植生、地域住民の生計活動、森林管理体制などに与えている影響について、定量的・定性的な実態調査に基づいた分析を行い、バイオガスの導入に関する正負のインパクトや課題を明らかにします。(伊藤香純)



森林が荒廃したネパールの丘陵地

平成21年度文部科学省「国際協カイニシアティブ」 教育協力拠点形成事業に2件 昨年に引き続き採択

農学知的支援ネットワークによる科学技術協力モデルの構築

昨年取りかかった農学知的支援ネットワークを今年度正式に立ち上げる予定です。文部科学省、国際協力機構等の協力を得て、大学支援や科学技術協力予算の獲得にも取り組み、ネットワークを活かした活動の実用性を示したいと考えています。そのため、全国から9名の準備委員と文部科学省、農林水産省、国際協力機構および国際農林水産業研究センターからアドバイザーをお願いして準備を進めています。また、昨年度実施したリソース・ニーズ調査結果を基に、今年度は国内外の共同研究提案に向けた可能性調査を実施し、国内研修を含む科学技術協力プロジェクトの具体案作成に取り組みます。さらに、大学による科学技術協力の先事例を集め、大学が戦略的に科学技術協力を実施するための方策を検証し、ネットワーク関係者と広く共有したいと考えています。(浅沼修一)

開発途上国における拠点大学を中心とした農産物加工産業振興モデルの構築とその普及

この事業目的は、カンボジアの農業分野の基幹大学である王立農業大学(RUA)に、農家の実情や現場での実践に基づいた研究・教育体制を構築することを支援し、大学による農産物加工品振興/一村一品の開発モデルとしてカンボジア国内および近隣諸国に普及することです。平成20年度、ICCAEはタケオ州の一協力農家を選び、派遣酒造専門家の指導のもとで、RUAの教員と一緒に従来の醗酵法と蒸留法の改良に取り組みました。日本の技術を直接持ち込むのではなく、現地の伝統的な醗酵と蒸留の改善により試作した蒸留酒は、匂い、味、外見とも大変好評でした。また、現地調査を通してRUA学生への実習機会、現地研修を通してRUA・名古屋大学農学部両学生への教育機会を提供しました。本年は、さらに品質の向上を目指すとともに、商品化に向けた生産農家のグループ化、品質管理、販路開発のための生産量確保を目指します。(松本哲男)



第3回カンボジア一州一品展示会にて改良酒の商業大臣への説明

外部評価委員会（平成15～19年度）開催される

ICCAE設立以来2回目の外部評価が2009年3月23日に行われました。今回の外部評価は2003から2007年度の5年間の活動が対象になりました。評価委員会は、田中耕司京都大学地域研究統合情報センター長、西川芳昭名古屋大学国際開発研究科教授、柘植尚志名古屋大学生命農学研究科副研究科長の3名で構成され、田中委員長を議長に自己評価報告書に対して質疑応答が行われた後、外部委員から意見と提案が出されました。5年間の活動評価とともに、教員の研究とICCAEのミッションであるコーディネートなどのセンター業務の関係、将来、ICCAEが教育にどこまでどのように携わるのか、紀要の今後の位置づけについて焦点を当て、討議が行われました。（松本哲男）

平成21年度名古屋大学総長裁量経費に1件採択

ガボン国における森林資源利用の実態に関する研究

ガボン国は、アマゾンに次ぐ熱帯林地域であるコンゴ河流域に位置し、高い森林率と生物多様性を誇る一方で、熱帯雨林の急速な減少が最も懸念されている国の一つです。そのため、適切な管理に向けた対策が必要とされていますが、これまでに同国の森林資源利用の実態や熱帯雨林減少の要因・メカニズムは明らかになっておらず、対策を講じるための基本的なデータもありません。この研究では、ガボン国において熱帯雨林地域に住む人々の森林資源利用の実態やその経済効果を把握するための現地調査と分析を行い、その結果をガボンのみならず他のコンゴ河流域諸国における熱帯雨林保全のための方策、また国際社会による支援の方向性を見出すための貴重な材料とします。（伊藤香純）

JICA課題別研修（長期）「生命農学国際コース」の開始

名古屋大学大学院生命農学研究科は、農業／農村開発のための政策立案・実施・マネージメントに関わっている開発途上国の大学・研究機関・省庁の職員の人材育成を目的としたJICA課題別研修（長期）「生命農学国際コース」を2009年4月より開始しました。

ICCAEのプロジェクト開発研究分野では、第一号となるガボンからの研修生、Mr. Mikolo Yobo Christianを博士課程（後期課程）に受け入れました。Mr. Mikoloは、ガボンの熱帯生態研究所（IRET）に所属する研究員で、主にガボン土着のフルーツが地域住民の生計に与えている影響について調査・研究を行い、これらを保全するための政策案を含む博士論文を作成する予定です。（伊藤香純）



外国人客員研究員

ネリカ耐冷性の品種間差異の検定とケニア高原地方に適した耐冷性イネ品種の選抜

ピーター・マシンデ ジョモケニヤッタ農工大学農学部園芸学科上級講師
ICCAE客員研究員（2009年5月7日～11月5日）

ケニアのコメ増産を図る上で、高原地帯における稲作振興は極めて重要です。しかし、ケニアの高原地帯では、低温による不稔糊の発生（障害型冷害）が問題となっています。ジョモケニヤッタ農工大学は、この問題を解決するため、ICCAEと共同研究を行っています。私は、昨年ICCAEに招へいされたフンジャ・ムラゲ博士の研究を引き継ぎ、ネリカ品種の耐冷性を検定し、ケニア高原地方に適した耐冷性イネ品種を育成するための研究に取り組んでいます。私は、日本滞在期間中、ネリカの耐冷性を明らかにするとともに、日本の優れたイネ研究手法を学びたいと考えています。



略歴 1970年ケニア生れ。ジョモケニヤッタ農工大学農学部園芸学科卒業後、同学科ティーチング・アシスタントならびに助講師として勤務。1998年ナイロビ大学農学部園芸学科修士課程を修了し、ドイツ・ハノーバー大学博士課程にて2003年博士号（園芸学）を取得。2005年岡山大学客員研究員。2003年12月より現職。

着任挨拶

花里 信彦 国際協力機構 (JICA)、企画部参事役 (国際科学技術協力室参事役、企画部総合企画課長兼務) 客員教授 (2009年4月2日～2010年3月31日)



土木技師からスタートした大学卒業後の人生は、25年前の西サモアへの派遣 (青年海外協力隊) が転機となり、JICAをはじめ、国連、外務省での業務を通じ海外で様々な経験を重ねるうちに開発/途上国支援一本やりの人生になってしまいました。今までの海外経験は14年を超えます。そんな世界から一歩外に出て、2008年1年間名古屋大学でGCOEの国際化を担当させていただきました。そのときに手がけた大学のネットワーク化と大学が持つ知的資産の国際協力への活用を推進するための研究が今回のTOR (terms of reference) です。新たな可能性をODAにもたらすのは大学しかありません。わが国の大学が培ってきた高度な知と経験を国際協力に効果的に活かすためのシステムを創るために、自らの経験を余すことなく活用し役立てたいと思っています。

略歴 1959年生れ。熱帯衛生工学修士:英国リーズ大学大学院 専門:途上地域開発、開発援助論
1982年学部卒業後2年間の民間会社での勤務を経て1984年にJOCV参加 (西サモア国土木施工隊員)。その後UNVに参加 (クック諸島上級土木技師)。英国留学後、JICA Jr. 専門員 (熱帯衛生工学) に採用 (2年間はプロジェクト専門家としてインドネシア勤務)。1995年旧国際協力事業団 (JICA) 入団後、無償資金協力調査部、インドネシア事務所、外務省経済協力局開発協力課課長補佐を歴任。2002年にJICA復職後、企画・評価部企画課長代理、総合企画チーム長を経てインドネシア事務所次長。2008年1月より名古屋大学に外向 (GCOE特任教授)。2008年12月からJICAに復帰し現職。

離任挨拶

櫻井 武司 和光大学経済経営学部 教授 客員教授 (2008年4月2日～2009年3月31日)



「アフリカ農業・農村開発のための実践的戦略の構築に関する研究」という非常に挑戦しがいのある研究テーマをいただき、1年間取り組んできました。アフリカの農業・農村開発を持続的なものにするためには、遠回りに見えますが、アフリカの農業研究機関の能力を高める必要があります。それには博士号を持つ農業研究者をアフリカで養成することが不可欠であることから、「日本アフリカ農業教育研究センター」構想を立案しました。この構想は、とりわけ稲作に関する研究に焦点をあてています。というのも、コメを増産することはアフリカ農業のもっとも重要な課題の一つだからです。

オープンセミナー (2009年3月)

回数	日時	テーマ	講師	所属
2008年度 8回	3月24日	ケニアの開発課題解決に向けた ジョモケニヤッタ農工大学の研究活動 —日本の大学との連携の可能性—	エスター・ カハンギ氏	ジョモケニヤッタ農工大学副学長・教授 (ケニア)
		アフリカ農業・農村開発のための 実践的戦略について: 稲作を中心に	櫻井 武司氏	和光大学 経済経営学部 教授 農学国際教育協力研究センター客員教授

オープンセミナー (2009年4月～2009年7月)

回数	日時	テーマ	講師	所属
2009年度 1回	5月20日	ササゲの <i>Striga gesnerioides</i> 抵抗性育種に 利用可能な適切な遺伝子資源の同定	村中 聡氏	国際熱帯農業研究所 (IITA) 研究員 (ナイジェリア)
2回	5月27日	挿し木法を用いたヤムイモの大量増殖システム の開発と西アフリカにおける普及について	菊野日出彦氏	国際熱帯農業研究所 (IITA) 研究員 (ナイジェリア)
3回	7月17日	節水栽培に適したイネ育種素材の育成 —IRRI 日本共同研究プロジェクト—	小林 伸哉氏	国際稲研究所 (IRRI) 研究員 (フィリピン)